

自由意志信念が援助行動にもたらす効果

—日本・イギリス・アメリカの比較研究—

藤田 太陽

自由意志の存在を否定すると、援助行動が抑制されることが報告されている。このメカニズムについて、従来の研究では自由意志信念の低下、すなわち自由意志の否定が自己制御を弱めることで社会的行動に影響を与えると解釈されてきた。しかし、この説明では自由意志の否定がなぜ自己制御を弱めるのかが明確ではない。そこで本研究は、このメカニズムを心理的リアクタンス理論の観点から説明することを試みた。心理的リアクタンス理論によれば、人は自由を脅かされると、その自由を回復しようとする動機づけが生じる。自由意志は人々の行動選択や意思決定の自由の基盤として見なされるため、その否定は重要な自由への脅威として知覚される可能性が高い。

以上の議論から本研究では、自由意志の否定による援助行動の抑制が、単なる自己制御の低下ではなく、自由を脅かされたことへの反発的な反応である可能性を検討した。そのために、以下の2つの仮説を設定した。第一の仮説として、自由を脅かされたことへの反発的・否定的感情と援助行動との間に負の相関が見られると予測した。第二の仮説として、自由意志が否定されると援助行動が抑制されると予測した。

本研究は研究1、研究2ともに以下で示される同様のパラダイムで実施した。具体的には、実験は自由意志信念の操作、自由意志信念尺度および感情評定尺度の測定、心理的リアクタンスの操作および測定、援助行動の測定の順序で行われた。まず、参加者を自由意志・決定論・統制の3条件に無作為に割り当てられた。自由意志信念の操作として、条件ごとに、自由意志に関連する内容、決定論に関連する内容、それらに無関係な内容が記述された15個の短文を1文ずつ提示し、それぞれの文に対する考えを記述させた。続いて、自由意志信念尺度と感情評定尺度を測定した。次に、参加者を心理的リアクタンス喚起あり条件となし条件の2条件に無作為に割り当てた。心理的リアクタンスの操作としては、自由意志信念尺度に対する参加者間の相対的な位置づけを提示するという架空のフィードバックを行った。さらに、フィードバックの内容を踏まえて、心理的リアクタンスとして否定的感情を回答させた。最後に、援助行動として、追加謝礼のない任意の調査への参加意思を回答させた。

研究1では、日本人を対象に実施した。その結果、否定的感情と援助行動との間に負の相関関係は確認されず、自由意志信念の否定による援助行動の抑制も確認されなかった。したがって、本研究で設定した2つの仮説はいずれも支持されなかった。さらに、研究2では、日本・イギリス・アメリカの3カ国を対象に、統制条件を排除して同様の実験を実施し、探索的に文化差の検討を行った。その結果、いずれの国においても2つの仮説は支持されず、文化差も確認されなかった。

これらの結果は、決定論的世界観の提示が必ずしも自由への脅威として機能しないことを示唆している。その要因として、自由意志信念と決定論信念の関係性が本研究の理論的前提とは異なっていたことが挙げた。本研究の結果は、これらの概念が必ずしも対立的なものとして理解されているわけではないことを示した。このような両概念の両立的な理解のもとでは、決定論的世界観は自由意志と矛盾しない。そのため、そのような世界観の提示が自由意志の否定につながらなかった可能性がある。これらの知見は、自由意志信念と社会的行動の関係性を検討する際の理論的前提や実験パラダイムの妥当性について再考する必要性を示唆している。(社会心理学)